「英才児」問題と『赤い山を見る人たち』

――上原輝男の〈誕生〉、起点２０２６――

須貝千里

□起点２０２６？

「夕日」の側からの〈眼差し〉の中で １ ――冒頭反復

「赤い山を見る人たち」から見える景色と「夕日」の側から見える「「赤い山を見る人たち」の二重性に直面し続けて（混濁・混沌）

「夕日」の側からの〈眼差し〉の中で ２ ――五色変化（ゴシキヘンゲ）、１字上げ、一文空白

①「は」の省略――「わたしは」「のぼる人は」の省略によって、主語が判読不可能な箇所があること（混濁・混沌）

② 黒白明暗――色彩（混濁・混沌の中での、乱反射）

③「、」　読点顕現――「夕日」の側からの〈眼差し〉を前提にして、の、「夕日」の意志の顕現

④ 造山運動、「赤い山」の一字上げ――最後の一行で、「読点顕現」を前提にして（「夕日」の側からの〈眼差し〉を前提にして、の、「夕日」の意志の顕現）

⑤ 一文空白―― 最後の一行で、「一文空白」。この事態は、「夕日」の側からの〈眼差し〉を前提にして、「夕日」の意志の顕現。問として顕れ出て来るのは、〈生〉と〈死〉の〈事件〉の現場としての「山」／〈生〉と〈死〉の〈事件〉の現場としての「人」、この二重の事態が「母」の問題として問われていくこと（南方熊楠、柳田國男の「山の神とオコゼ」問題、折口信夫の「妣が国」問題、上原輝男の「犠牲」「身替り」問題として問われていくこと）

「夕日」の側からの〈眼差し〉の〈読み〉は、地の文を補っての「読むこと」の試みで、ピカソの『ゲルニカ』、その連作である『泣く女』（提示）との対照批評にひらかれていく。

「赤い山を見る人たち」の見たものは「泣く女」としての「母」であった。「山」であった。「母」としての「山」は、「思考」（論理）から「感情」（イメージ）へ、と、いう爆発、「トランスフォーメーションはョン」（構えの転換）とともに現れ出てくる。「のぼる人」からの側の次元は、「カメラ」の側からの次元によって把握され、それは、「山」という空間と時間の「四次元」世界が〈遠近〉の次元、〈黒白明暗〉の次元で、と、いくことであるが、「夕日」の側からの次元からは、事態が「母」として把握され直していく、の、で、ある。（同様に、「海」も、だ。）

事態は「二相系」「順違二面」（宮澤賢治）で、「英才児」問題の１事例としての提起であり、この小文は、『夕日の迷子』についての考察に引き続いて、の、上原輝男の〈誕生〉に関わる提起になっていく、の、で、ある。以下、詳細。

（１）心意伝承としての、「夕日」の側からの〈眼差し〉

この小文は、聖徳学園小学校の児童作文についての考察である。同校のすべての児童作文の分析ではない。すべての児童作文の分析のための問題提起ではあるが、そうした試みのだいぶ手前の報告である。では、あるが、この試みは、聖徳学園小学校の「英才児教育」のこれからの課題を照らし出していくために一石を投ずることにはなるだろう。

これは、上原輝男の側からの、礫と波紋の相関関係の見極め、で、ある。

この小文は、聖徳学園小学校における上原輝男の〈誕生〉についての一文として認められていく、こう言って、よい。未発表の拙稿『夕日の迷子』では「顕」「信」「文類」をめぐっての問題を検討したが、これは、こうした検討課題を引き続き問い、聖徳学園小学校の前身、「親鸞の学校」としての関東中学校、その開校者である和田幽玄の〈夢〉の問題と課題について論じていくものにもなっていく、こう言っても、よい。小学校３年生の作文『赤い山を見る人たち』における心意伝承という事態を浮上させ、「親鸞の学校」としての聖徳学園小学校における心意伝承という事態を浮上させていくものになっていくだろう。

「夕日」の側に、で、は、なく、「夕日」の側から、〈親鸞〉の面影が照らし出されて、だ。

流罪に処された親鸞上陸、居多ケ浜（こたがはま）の夕日

このような写真を掲示すると、小文は、親鸞の実人生の伝記的問題を論ずるように思われるが、そうしたことがない訳ではないが、そのことを主眼に論じよう、と、いうのではない。「顕」が〈顕レ〉であって、〈顕ス〉ではないこと、「信」が、〈こちら側〉にての〈顕ス〉ではなく、〈向こう側〉からの〈顕レ〉であって、常に「文類」の中に現れ出て来る事態であることを問題にしていこう、と、している。これも礫と波紋の相関関係の見極めに関わって、だ。

この写真においては、「夕日」からの〈眼差し〉が〈向こう側〉からの〈眼差し〉で、この〈眼差し〉は、〈４つ目の眼差し〉として、問題になっていく。礫と波紋の相関関係の見極めに関わって、だ。

こう言うことができる。

「礫」は「カメラ」からの〈３つ目の眼差し〉であり、「波紋」は「夕日」からの〈４つ目の眼差し〉である。前者の〈眼差し〉は「意味ある声音」であり、後者の〈眼差し〉は「意味ない声音」である。しかし、「意味ない声音」は無数の点であり、無数の「点」は「意味」であるが、それは反「意味」という事態である、と。

この小文は、上原輝男の心意伝承の提起に倣って、折口信夫の古代学を援用して記述されていく。児童の側からの「教育学の発生」に関する、１事例の考察として、で、ある。

と、いっても、この時点で、わたくしは、何を考え、何を書こうとしているのか、全く、分か

らない。書くことが新たな地平をひらいていくことになるのか、既知の地平に引き戻されていくことになるのか、本当のところは分からない。
　そうであっても、言語行為の絶対的矛盾の渦中に身を晒していこう。
　この時、わたくしの支えになるのは、「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。言葉は神であった。」ではなく、「光は闇の中にあった」でもなく、「彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来た」（これら『ヨハネの福音書』）でもなく、親鸞の方法である「文類」（『顕浄土真実教行証文類』）である。親鸞による、「横超」としての〈超越〉の提起である。鈴木大拙の、その提起を踏まえての「日本的霊性」の提起である。「思考」（論理）ではなく、「感情」（イメージ）に身を晒してみることである。「トランスフォーメーション」（構えの転換）という事態である。
　注記しておくなら、『聖書』も「福音書」の集積であり、「文類」であるのだが、その読まれ方において、「文類」であること自体の意義は見過ごされ、１つ１つのエピソードが問題にされ、その点では、親鸞の『顕浄土真実教行証文類』の読まれ方も同様である、と、記しておこう。
（分かり難い言い方をしているが、）ここでは立ち入らないで、こう言っておこう。

　わたくしは、「トランスフォーメーション」（構えの転換）について、「夕日」からの、〈向こう側〉からの〈眼差し〉によって論じていこう、と、している。「山」も、「海」も、「母」の問題として、だ。「銀河」も、で、ある、と。

（２）『赤い山を見る人たち』における一文空白、なぜ？
　　―〈機能としての語り手〉としての「夕日」と〈生身の語り手〉としての「私」のネジレに振り回されて―

　２０２６年３月下旬、聖徳学園小学校の河上裕太先生から、２０２５年度版『ぴっぱら』５６号が送られてきた。その中の一編、小学校３年生の作文『赤い山を見る人たち』について取り上げる。この作文へ、の、考察は、昨年の『ぴっぱら』５５号に掲載されていた小学校４年生の作文『夕日の迷子』で問題にした「英才児」問題とは何か、に、関わっての問題提起に引き続いて、の、ものである。
（『夕日の迷子』については、別稿を参照していただくことにして、）本稿では、『赤い山を見る人たち』を、まずは、読んでいただきたい。その上で、右記の「引用者注」を読んでいただきたい。（出来たら、作文本文は、文節ごとに区切って、ゆっくりと、音読してみて下さい。）

赤い山を見る人たち

３年生　Ｓ．Ｔ

赤い山あなたはどうして赤いのかしら	注：「のぼる人」（対象人物）の眼差し、「あなた」は「赤い山」
赤い山わたしは夕やけあびて赤いのよ	注：「赤い山」（視点人物）の眼差し、「わたし」は〈語り手〉
赤い山あなたをのぼるのたのしいわ	注：「は」は省略だが、「のぼる人」（対象人物）の眼差し
赤い山わたしをのぼる人いるようね	注：「は」は省略だが、「赤い山」（視点人物）の眼差し
赤い山あなたは赤オレンジにかがやくのね	注：「のぼる人」（対象人物）の眼差し
赤い山あなたはどうして大きいの	注：「のぼる人」（対象人物）の眼差し
赤い山土があつまりできている	注：「は」は省略、「赤い山」（視点人物）？の眼差し
赤い山わたしをとる人多いのね	注：「は」は省略だが、「赤い山」（視点人物）の眼差し
赤い山わたしはよこに長いようね	注：「赤い山」（視点人物）の眼差し
赤い山あなたはにんきの山なのね	注：「のぼる人」（対象人物）の眼差し
赤い山見る人多くて人気者	注：「は」は省略、「赤い山」（視点人物）？の眼差し
赤い山あなたはとおくから見えるのかしら	注：「のぼる人」（対象人物）の眼差し
赤い山わたしはとおくからも見えるのかしら	注：「赤い山」（視点人物）の眼差し
赤い山わたしは遠くからも見えるのよ	注：「赤い山」（視点人物）の眼差し
赤い山わたしを見る人おおいのね	注：「は」は省略だが、「赤い山」（視点人物）の眼差し

赤い山一番上は雪がふるほどさむいのよ　　注：「は」は省略だが、「赤い山」（視点人物）の眼差し
赤い山あなたは赤くないときがあるの　　注：「赤くない」、「のぼる人」（対象人物）の眼差し
赤い山わたしはくろいときもあるようね　　注：「くろい」、「赤い山」（視点人物）の眼差し
赤い山わたしは白いときもあるようね　　注：「白い」、「赤い山」（視点人物）の眼差し
赤い山みんなをみまもるみんなにみられる、赤い山　　注：「は」は省略、「赤い山」（視点人物）？の眼差し。文末「、」？
注：「、」？を前提にして改行、１字上げは、造山運動。

（学校文集『ぴっぱら』５６号（２０２６年３月）収録。原文のまま　松川小百合指導）

「赤い山」（視点人物）の〈眼差し〉か、「のぼる人」（対象人物）の〈眼差し〉か、は、不明で、今までの「は」をめぐっての混濁、混沌が、「１字上げ」に集約化されている。これは、今まで潜在していた「夕日」からの〈眼差し〉が、「、」の「意味ない声音」によって顕現し、「赤い山」が隆起する事態である。

礫と波紋の相関関係の見極めに関わって、だ。

で、一字上げなのだ。

そもそも「赤い山」の「赤い」は「夕日」に照らされての事態で、「赤い山」の冒頭反復には、「赤い山」としての「私」の自己認識だけでなく、「赤い山」への「のぼる人」からの〈眼差し〉だけでなく、「赤い山」からの〈眼差し〉が潜在している。その上で、「赤い山」の冒頭反復は「夕日」からの、「山」への〈眼差し〉の顕現である、と、いうことに、なる。

槍ヶ岳、象徴的だ。

この時に生起しているのは、対象人物にされていた「のぼる人」が視点人物にされて、視点人物から対象人物にされた「赤い山」から逆に問われていくのかも、と、いう、「夕日」からの眼差しの中での混濁、混沌。だ、と、したら、これは、〈事件〉じゃないか？「のぼる人」が〈語り手〉として台頭！この〈語り手〉をめぐってのトラブルが、「赤い山」の一字上げ表記、及び、以下の一文空白によって、提示されている。これは〈事件〉だ！「夕日」からの〈眼差し〉の生起によって、槍ヶ岳は問われている。〈生〉が〈死〉であるから〈生〉であるということ、が、だ。「山」は「母」であるが、このことは「母」の側から、と、いうこと、だ。

で、あるので、こうなる。

この作文における言説葛藤は、「夕日」から、と、いう、〈向こう側〉からの――そうだ、〈神〉の〈眼差し〉からの「呪言」、「国文学の発生」（折口信夫）――、そのバリエーションである。〈神〉の起源は〈神〉の起原として問われている。「母」は「母」を問うことによって、こうした事態が浮かび上がってくる、の、だ、と。

この事態には、「横超」であること、このことの意義が示されている。（これは、〈物語〉ではなく〈小説〉として、〈物語〉を〈超越〉の側から問題化していって、の、だ。）

事態が込み入っているので、整理していこう。

〈１つ目の眼差し〉は「わたし」から、の、であり、これは「赤い山」の〈眼差し〉、で、〈２つ目の眼差し〉は「赤い山」（視点人物）に対する、これは「のぼる人」（対象人物）の眼差し、で、ある。ただし、「赤い山」の〈眼差し〉と「のぼる人」の〈眼差し〉は揺らいでいる。したがって、〈視点人物〉からの〈眼差し〉であるのか、〈対象人物〉からの〈眼差し〉なのか、を、判定し難い箇所がある。

それだけではない。

「は」の省略によって揺らぐ「主語」、２つの〈眼差し〉を捉えている〈３つ目の眼差し〉は、〈語り手〉としての、「赤い山」であり、語り手である「わたし」の〈眼差し〉であるが、「カメラ」の〈眼差し〉でもある。これは、〈生身の語り手〉としての「赤い山」の〈眼差し〉とも

う一つの〈生身の語り手〉としての、「カメラ」の〈眼差し〉という事態の混濁、混沌、で、あり、〈機能としての語り手〉としての「夕日」からの〈眼差し〉が引き裂かれている。

ここに〈３つ目の眼差し〉をめぐっての、〈４つ目の眼差し〉の問題と課題がある。

これは、視点人物としての「赤い山」と対象人物としての「のぼる人」の、両者の〈外部〉の〈眼差し〉のあり方をめぐっての問題と課題であり、「夕日」からの〈眼差し〉、潜在している〈機能としての語り手〉からの〈眼差し〉、〈向こう側〉からの〈眼差し〉の在り方をめぐっての問題と課題である。

どういうことか。

この事態は、〈３つ目の眼差し〉が、「赤い山」であり、「カメラ」であり、と、いう〈外部〉であり、それが〈言語以前・了解不能の領域〉としての〈外部〉、「夕日」へ、で、はなく、「夕日」から、の、〈眼差し〉を分かり難くしてしまっているということ、で、ある。この曖昧な、攪乱された事態ゆえに、「赤い山」が各文の冒頭で反復表現されているのであろう。

こうした〈３つの眼差し〉をめぐっての事態は、（４つ目の眼差し）である「夕日」の〈眼差し〉を混濁させ、混沌とした事態に追い込んでいく。この「夕日」の〈眼差し〉は、曖昧な〈３つ目の眼差し〉と共振し、そのことによって、「夕日」の〈眼差し〉は、「カメラ」の〈眼差し〉と、揺らぐ「赤い山」（視点人物）の〈眼差し〉と「のぼる人」（対象人物）の〈眼差し〉に引き裂かれ、しかし、〈言語以前・了解不能の領域〉における「夕日」からの〈眼差し〉は、「赤い山」という冒頭表現の反復、〈３つ目の眼差し〉による、五色変化としての、「は」の省略による揺らぐ主語の「不安定さ、黒白明暗、読点顕現・造山運動・揺らぎ」の極限で、一文空白という事態を招来していく。〈４つ目の眼差し〉はこの事態に翻弄されているのである。（繰り返しであるが、〈４つの眼差し〉の現れ方を機械的に論じてはならないことに、要注意。この現れが問われていく時には、それぞれの作品に即しての現れ方を問題にしていくことが求められている。）

この作文は、松川小百合先生の指導によるもので、信濃毎日新聞、朝日新聞夕刊に掲載された、ある写真を基にして、書かれたもの、と、のことである。その写真を、次に掲示する。（この写真は、２０２５年、夏山シーズン本番を迎える中、信濃毎日新聞松本本社の記者二人が室堂から北アルプスへ、一週間かけて縦走したが、その折のもの。三俣山荘の前から正面にそびえる槍ケ岳が夕陽でオレンジ色に染まっていた。パーティーを組んだのは、青木信之記者（42）と藤森秀彦編集委員（64））

掲載文集の編集後記の一つに、松川先生は、児童作文に見られる「多面体に光を当てた時、角度によって光り方が変わるように、その時、その瞬間に出てくるものが確かにあるように思います。そうであるならば、わたくしたちは一瞬のきらめきをのがさずに捉えたいと思います。」と記している。直接、この作文について言及しているわけではないが、「多面体」、「一瞬のき

らめき」を、わたくしは、英才児の〈４つの眼差し〉問題として、受け止めようとしている。
事態をまとめておこう。

〈１つ目の眼差し〉は「わたし」から、の、であり、これは「赤い山」の〈眼差し〉、で、〈２つ目の眼差し〉は「赤い山」（視点人物）に対する、これは「のぼる人」（対象人物）の眼差し、で、ある。ただし、「赤い山」の〈眼差し〉と「のぼる人」の〈眼差し〉は揺らいでいる。
したがって、視点人物からの〈眼差し〉であるのか、対象人物からの〈眼差し〉なのか、を、判定し難い箇所がある。
それだけではない。
「は」の省略によって揺らぐ「主語」、２つの〈眼差し〉を捉えている〈３つ目の眼差し〉は、〈語り手〉としての、「赤い山」であり、語り手である「わたし」の〈眼差し〉であるが、「カメラ」の〈眼差し〉でもある。これは、〈生身の語り手〉としての「赤い山」の〈眼差し〉ともう一つの〈生身の語り手〉としての、「カメラ」の〈眼差し〉という事態の混濁、混沌、で、あり、〈機能としての語り手〉としての「夕日」からの〈眼差し〉が引き裂かれている。
ここに〈３つ目の眼差し〉をめぐっての問題と課題がある。
これは、視点人物としての「赤い山」と対象人物としての「のぼる人」の、両者の〈外部〉の〈眼差し〉のあり方をめぐっての問題と課題であり、「夕日」からの〈眼差し〉、潜在している〈機能としての語り手〉からの〈眼差し〉、〈向こう側〉からの〈眼差し〉の在り方をめぐっての問題と課題である。
どういうことか。

この事態は、〈３つ目の眼差し〉が、「赤い山」であり、「カメラ」であり、と、いう〈外部〉であり、それが〈言語以前・了解不能の領域〉としての〈外部〉、「夕日」へ、で、はなく、「夕日」から、の、〈眼差し〉を分かり難くしてしまっているということ、で、ある。この曖昧な、攪乱された事態ゆえに、「赤い山」が各文の冒頭で反復表現されている。
こうした〈３つの眼差し〉をめぐっての事態は、（４つ目の眼差し）である〈読者の眼差し〉を混濁させ、混沌とした事態に追い込んでいく。この〈読者の眼差し〉は、曖昧な〈３つ目の眼差し〉と共振し、そのことによって、〈読者〉は、「カメラ」の〈眼差し〉と、揺らぐ「赤い山」（視点人物）の〈眼差し〉と「のぼる人」（対象人物）の〈眼差し〉に引き裂かれ、しかし、〈言語以前・了解不能の領域〉における「夕日」からの〈眼差し〉は、「赤い山」という冒頭表現の反復、〈３つ目の眼差し〉による、五色変化としての、「は」の省略による揺らぐ「主語」の不安定さ、黒白明暗、読点顕現・造山運動・揺らぎの極限で、一文空白という事態を招来していく。〈４つ目の眼差し〉はこの事態に翻弄されている。

この混濁はナンダ？
この混濁は混沌だ！

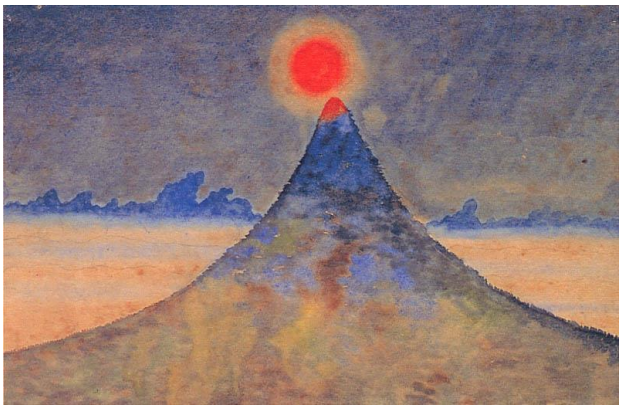
しかし、これが大事。
すべては「赤い山」の隆起、そして、「わたし」という一人称と「あなた」という二人称を１つのものとして把握する事態に向かっていき、分かんなくなっちゃって、一文空白という事態へ、と、なっていく。〈３つ目の眼差し〉としての、「夕日」からの〈眼差し〉という〈機能としての語り手〉によって、そして、〈４つ目の眼差し〉によって問われていく。こうした〈眼差し〉は、「レイヤー」として、〈言語以前・了解不能の領域〉において、発動され、心意伝承としての〈親鸞〉の面影を引き出していくのである。

以上、「『赤い山を見る人たち』における一文空白、なぜ？」について、「〈機能としての語

り手〉としての「夕日」と〈生身の語り手〉としての「私」のネジレに振り回されて」、と、いうことで考えてきたが、このことは、「〈こちら側〉からの「カメラ」によってと〈向こう側〉からの「夕日」によって」、と、いう事態の問題に焦点化されていく。で、〈生身の語り手〉としての「カメラ」の支配力を超えて、「夕日」が〈機能としての語り手〉として顕現して、地の文を包摂していって、最後の「一文空白」は「意味ない声音」であるがゆえに、「夕日」の眼差しからの発見が何であったのか、を語っていくのである。「赤い山」という冒頭表現の反復、「は」の省略、黒白明暗、読点顕現・造山運動も、この事態の中にある。そして、揺らぎの極限で、一文空白となる。このことは、「カメラ」によって、事態が「粒子」として把握され、「夕日」によって、事態が「波」として把握されて、と、いうことである。「粒子」は一単位で「意味」で、「波」は「点」の集合で複数単位、「意味」と反「意味」が多重化して、で、ある。

（３）「日輪」からの〈眼差し〉から、「銀河」からの〈眼差し〉から

先の「槍ケ岳」の写真に、宮澤賢治の『日輪と山』と呼ばれている絵を添えて、問題と課題についての補いをしておこう。



この宮澤賢治の絵にも、「山の中」の〈１つ目の眼差し〉と〈２つ目の眼差し〉、「山の外」からの〈３つ目の眼差し〉、「山の外」の「外」からの〈４つ目の眼差し〉をめぐっての言語運動という事態を見出すことができる。「山」の「中」で、「山」の「外」の「日輪」から、が、想起されるので、事態は〈４つの眼差し〉で、と、なる。「中」と「外」に止まれば、〈物語〉で、「外」の「外」に開かれれば、〈小説〉で、賢治の「多視点」は後者で、「粒子」ではなく、同一の「波」上で、「点」の相互関係として問題にされていくことになる。そして、〈物語〉は〈生〉と〈死〉の事件の坩堝で、〈小説〉はその事態を〈生〉と〈死〉の交点において問題化していくのである。（先の、ピカソ『泣く女』も同様に問題にしていくことができよう。）

ここで指摘したことに，（南アルプスが対象ではあるが、）飯田蛇笏の句、

芋の露連山影を正しうす

を重ねてもよい。これは朝の句であり、「朝日」からの眼差しが〈向こう側〉からの〈３つ目の眼差し〉で、それに対して、〈こちら側〉からの〈眼差し〉が、事態に向き合っている。この場合も、「カメラ」の〈眼差し〉の介入がないので、混濁し、混沌とした事態は生じていない。「影を正しうす」とは、いかなる事態の〈顕レ〉であるのか。「連山」とはいかなる事態か。そこでは〈生〉と〈死〉をめぐって何が起こっているのか。「は」の省略によって、何が喚起されていくのか。「芋の露」には「連山」が映し出され、そのことによって、「芋の露」は「連山」に逆包摂されていく。〈向こう側〉からの「朝日」に照らされて、だ。

〈イーハトーブ〉発の、宮澤賢治の『農民芸術概論綱要』の「結語」、

……われらに要るものは銀河を包む透明な意志　巨きな力と熱である……

われらの前途は輝きながら嶮峻である
嶮峻のその度ごとに四次芸術は巨大と深さとを加へる詩人は苦痛をも享楽する
永久の未完成これ完成である

理解を了へばわれらは斯る論をも棄つる
畢竟ここには宮沢賢治１９２６年のその考があるのみである

を重ねてもよい。この文言に時刻はないが、「銀河を包む透明な意志　巨きな力と熱」は、いかなる事態の〈顕レ〉であるのか。「永久の未完成これ完成である」はどういうことか。「造山」ではないが、ここでは「造銀河」によって、だ。
そして、こう言おう。

「連山」も「銀河」も、〈向こう側〉からの、〈光〉、「銀河を包む透明な意志　巨きな力と熱」に照らし出されているのだから、と。

ここで、居多ケ浜（こたがはま）の「夕日」に照らされた「海」を思い浮かべて、も、よい。
で、あるので、ここから、宮澤賢治の「二相系」は「順違二面」である、と、いう「世界観認識」に及んでいってもいいし、フロイト、ユング、河合隼雄の提起する「深層心理」の問題に及んでいってもよいし、「量子力学」と「マルチバース宇宙論」の「粒子」と「波」の問題に及んでいってもよい。親鸞の「疑城胎宮」が「権仮方便」であり、「善」と「悪」が「一如」であることを前提にした「往還回向」の提起に、鈴木大拙の、親鸞の「超越」をめぐっての、「竪超」ではなく「横超」の提起に及んでいって、も、よい。
再び、こう焦点化していこう。

『赤い山をのぼる人たち』の場合は、「夕日」の側からの〈４つ目の眼差し〉によって問題化しよう、と、していくと、揺らぎの極限で、一文空白という事態が顕現している、と。

「赤い山」という表現の反復、五色変化としての、「は」の省略・黒白明暗・読点顕現・造山運動・一文空白という事態の中にある『赤い山をのぼる人たち』は、「日輪」から、の、〈眼差し〉から、「銀河を包む透明な意志　巨きな力」から、の、〈眼差し〉のバリエーション、だ。

これはすごいことではないか。

以上、わたくしの「問」は、こうした事態に反応し、聖徳学園小学校の児童作文、児童言説を検討の対象にしていったら、「英才児」問題をどのように把握できるのか、と、いうことにある。（このことは、松川先生の「レイヤー」と「言語」をめぐっての問題という国語教育研究の課題にも、本質的に関わっていくことである。）そして、わたくしは、聖徳学園小学校のような学校ではない、いわゆる一般校の児童言説をこうした〈眼差し〉によって、問題化していったら、どのような課題が現れ出てくるのか、を、問おうとしている。

（４）「母」の〈眼差し〉は、神の誕生の起原としての、豊穣と残虐の根原性

これは、上原輝男先生の「感情」（イメージ）と「思考」（論理）をめぐっての「トランスフォーメーション論（構えの転換論）についての一考察でもある。

ここでは、このことにまで言及していかないが、上原なら、「母」の問題について、折口信夫の「妣が国へ・常世へ　異郷意識の起伏」（『古代研究』の冒頭論文、初出は、『國學院雑誌』第26巻第5号（1920年）掲載。）を引いて、論ずるであろうこと、を、このことのみを指摘しておこう。

> 妣が国は、本つ国土に関する民族一列の憧憬から生れ出て、空想化された回顧の感情の的である。母と言ふ名に囚はれては、*ねのかたすくに*なり、*わたつみのみや*なりがあり、至り難い国であり、自分たちの住む国の俗の姿をした処と考へて居なかつた事は一つである。此は、妣が国の内容が、一段進んで来た形と見るべきで、語部の物語は、此形ばかりを説いて居る。*いなひの命*と前後して、波の穂を踏んで*みけぬの命*の渡られた国の名は、常世と言うた。

折口は「妣が国」を「魂のふる郷」と呼んだ。上原なら、ここから「山」としての、「海」としての「母」の問題について、論じていくであろう。「妣が国」が「黄泉の国」であり、「根の国」（根之堅州国）であり、「わたつみ」であり、「常世」であり、と、いう多重性を有していることに孕まれている、生と死、それは、豊穣と残虐という事態のことだ、だ、が、この事態から、『赤い山を見る人たち』における「心意伝承」問題に及んでいくであろう。（詳述しないが、「妣が国」、「黄泉の国」、「根の国」（根之堅州国）、「常世」の多重性に関わる研究は多くあるが、研究史の整理をしている論考、小村宏史「「根之堅州国――「黄泉の国」との関係――」をめぐって」（『国文学研究』第145号　2005年３月）、リンジー・モリソン「「妣の国」解釈の再考――古代日本人の「魂のふる郷」を捉え直す――」）（『アジア文化研究』第48号　2022年3月）の2編をあげておく。）

「母」の問題に関わって、「山の神」と「オコゼ」について、南方熊楠の「山神「オコゼ」を好むと云ふ事」（『東京人類学雑誌』第26巻第299号　1911年）があり、柳田國男の『山の神とヲコゼ』（寧楽書院　1936年８月）があり、「山の神」は「女神」として語られていることを取り上げておこう。柳田と南方の交流は、柳田が、この、南方の論考を読んで始まった、と、のことで、柳田の『山と人生』（『アサヒグラフ』第４巻２号から第５巻７号　大正１４（１９２５）年１月７日から８月１２日）には「１９．山の神を女性とする例多きこと」という文章もある。柳田の書の題簽は折口信夫によるが、折口の弟子の上原輝男は、南方、柳田の論考に伸張して、「母」の問題を論ずるであろう。上原は、柳田の『妹の力』（『婦人公論』大正14（1925）年10月号）にも触れて、「赤い山を見る人たち」は「女神を見る人たち」、「母を見る人たち」と言うかもしれない、とも。

で、上原輝男は、こう論ずるであろう。

「夕日」に照らし出されていく、「山」の、「海」の、その「母」としての豊穣と残虐の根原性を、神の誕生の起原として、だ。

こう言おう。

「トランスフォーメーション」（構えの転換）としての、「母」の豊穣と残虐、「オコゼ」を好み、食す「山の神」の〈顕れ〉で、『赤い山を見る人たち』は、「心意伝承」としての「母」の神話の再創成に向かっている、と。

生命運動とはそうしたものであり、この運動は、〈向こう側〉から、到達不可能な《他者》からの〈眼差し〉とともにある。

このことは、〈超越〉をめぐっての「竪超」ではなく「横超」の提起ということになっていく。

上原は、このように、Ｓ．Ｔの「赤い山を見る人たち」言説から、当該児童の、無意識の層、で、ある心意伝承界を掘り起こしていくのではないだろうか。豊穣と残虐を、「犠牲」と「身替り」について、と、いうように問題にしながら、だ。（このことについては、宮田雅智の「『自分』への扉をひらく心意伝承～特に犠牲論に関して～―上原輝男講義録①　日本教育史特殊講義（昭和５９年）より―」（『国語教育思想研究』２９号　２０２３年３月）を参照されたい。）

ここから、この、上原輝男の「トランスフォーメーション論（構えの転換論）の問題と課題を引き出していくことができる。「夕日」からの「母」への〈眼差し〉が〈３つ目の眼差し〉として、〈４つ目の眼差し〉として、問われていくことに関わって、だ。このように、『赤い山を見る人たち』における一文空白に収斂していく事態、その顕現が問われていく。

（５）一文空白は、教育学の発生の１事例として

このことは「レイヤー」問題の前提であり、教育と反「教育」の問題として、その意義を提起していくことになる。社会化を反「社会化」によって、逆包摂し、このことが、学校が社会化の要請に応えていく、と、いうように、だ。教師も児童も、この危うい要請に対しての当事者である。「親鸞の学校」としての聖徳学園小学校では、危うい当事者に求められるものとして、「権仮方便」が分かりやすさとして、「疑城胎宮」が現状に満足しないこととして、「三願転入」によって分かりやすさを超えてとして、と、いうように、親鸞の提起が学びの原理として、提起され続けてきた。和田幽玄が開校した関東中学校から聖徳学園小学校へ、と、いう１００年の歴史は、１９６９年以降の「英才（児）教育史」も、この提起の中にあり、学園は、この原理に今も包まれている。意義、問題と課題が問われ続けている。

この小文は、こうした学園の教育運動原理の中で読むことの試みとして、記してきたものである。児童の側からの教育学の発生に関する、１事例の報告として、で、ある。このことは、上原輝男の「児童言説研究」としての「心意伝承としての基層教育学」の可能性の探究としてなされている。「英才児」問題の探究としても、だ。このことは、上原輝男の〈誕生〉への「問」になっていくのである。

なお、「教育学の発生」は、折口信夫の「国文学の発生」の提起、鈴木大拙の「日本的霊性」の提起を前提にして、発せられている。小文は、小学校３年生の作文『赤い山を見る人たち』における「呪言」の発生、「国文学の発生」について論じたものである、と、言っても、よい。このことは、この作文の場合、一文空白によって実現している、と、いうように、で、ある。

この小文の冒頭の段落で、わたくしは、「この時点で、わたくしは、何を考え、何を書こうとしているのか、全く、分からない。書くことが新たな地平にひらかれていうことになるのか、既知の地平に引き戻されていくことになるのか、本当のところ分からないのだ。」と記したが、このことは、いまだ分からない。

正直なところ、「意味ない声音」に身を晒そうとしても、このことは「意味ある声音」に絡み取られていき、既知の地平をさ迷っているに過ぎない、と、思う。

分からない。

でも、Ｓ．Ｔのように、一文空白として投げ出されるものなっていること、この地点にたどり着いていること、を、願っている。この一歩が踏み出せていること、を、願っている。混濁、混沌、で、あっても、これ、すごく大変なことなのだから。上原は、この一歩のことを、小学校の３―４年生、「感情」（イメージ）から「思考」（論理）への転換期における「思考」（論理）から「感情」（イメージ）への再転換、「トランスフォーメーション」（構えの転換）というよ

うに提起していた、が、この小文においては、どうか。

■経緯と御礼、そして、追記

わたくしの、この「赤い山」顕現考は、一度書き上げたものを、松川小百合さんにお送りした。その折に、松川さんから丁寧な返信をいただいた。そこには、『赤い山を見る人たち』にふれて、「S 君のこの詩は、呼応するようでいて、時々そのリズムを乱すような一文が差し込まれるのが面白く、そのズレ、グラッとくる感じが、読者が置かれる〈四つ目の眼差し〉と言えるのでしょうか。」と、あった。この箇所に触れて、わたくしは底を抜かれた。奈落の底に引き込まれ、閃きが走った。
ナンダ！ナンダ！と掻き立てられた。

こういうことだ。
「山」と「母」、そして、「海」も、宮澤賢治の提起する「二相系」「順違二面」であり、そうだ、そして、鈴木大拙の提起する「AはAだと云ふのは、AはAではない、故に、AはAである。」という「即非の論理」であること、さらには、こうした事態を照らし出す起点が，「カメラ」から、「夕日」から、と、いうように、引き裂かれている事態を、思い起こしていたら、パブロ・ピカソの『泣く女』が顕れ出てきた。
これが「横超」だ。
この作品は『ゲルニカ』（１９３７年作）の連作の１作品だそうだが、「女」が「泣く」、根元的な理由が分かった。
スペイン内乱での〈生〉と〈死〉は、「山」そのものの問題であり、「海」そのもの問題であり、で、あることによって、「母」そのもの問題であった。この問題の中に、ナチス・ドイツ空軍のコンドル軍団によるスペイン・ビスカヤ県のゲルニカでの都市無差別爆撃が、あった。
『泣く女』（１９３７年作）では、おそらく、「夕日」の「母」のさまざまな「顔」、その表徴であった。
そして、「母」は多義的に問題になっていく。ナチス・ドイツの側で、スペイン・ビスカヤ県のゲルニカの側で、だ。事態には、犯罪としての区別はあるが、視点人物と対象人物の区別はない。
で、あれば、これが〈希望〉！？

『ゲルニカ』

これが「奈落の底に引き込まれ、閃きが走った」ということであった。
と、いうことで、本稿改稿。
で、次元の多重性に振り回され、ただただ、書いては直し、と、いうことを繰り返しているうちに、小学校３年生の作文『赤い山を見る人たち』の、「赤い山」の冒頭反復。五色変化としての、「は」の省略・黒白明暗・読点顕現・造山運動・揺らぎの極限で、一文空白、と、いう事態が「問」の対象として、顕れ出てきた。
事態は折り重なって、だ。
この改稿がひらかれていったのか、閉じられていったのか、自分にはよく分からないが、Ｓ．Ｔが、この作文で辿り着いた地点、一文空白がすごいことじゃないか！。これ以上書かないことが、いや、これ以上書けなくなってしまったことが、こう言った方がいいだろう。〈向こう側〉からの〈眼差し〉をめぐっての、「夕日」からの〈眼差し〉をめぐっての〈事件〉の只中に、Ｓが立たされていることが、で、ある。
ここから、Ｓがどのようにひらかれていくかはわからないが、すごいことなんじゃないか！
これは哲学的判断だ。「コギト」（デカルト）批判だ。「一人称単数の現在形」ではなく、「一人称単数が複数である現在形」の提起である。（松川さんの「レイヤー」への関心も、こうした「哲学史」問題の中にあるだろう。日本で

は、「ゴギト」は「堅超」として受け止められていった。これは「日本浪漫派」の問題である。わたくしの「横超」へ、の、関心は、この動向と対峙している。ここでは、詳述しないが、西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」の提起、と、も。）

Ｓの作品の誕生の場に立ち会っていた松川さんに重ねての感謝の意を表する、と、同時に、本稿がこうしてまとめ直されていったこと、を、記しておこう。その過程で気づかされたことは、「赤い山」においても、「人」においても、常に何かが起こっている、と、いうこと。この極めて当たり前のことに心打たれたこと、も。しかし、起こっていることは、〈こちら側〉からしか捉えられない、事態は混濁し、混沌としていること、も。

こうしたことは、礫と波紋の相関関係の見極めに関わって、問われていく。「夕日」からの〈４つ目の眼差し〉によって、で、ある。

こうした二重の〈眼差し〉の転回は、「四次元」世界を、さらなる多重次元世界に延長し、転回していく。

「粒子」は「波」であることによって、「粒子」は時間とともにあり、「波」と「波」も〈時間〉とともにあり、「波」は、想定としての「点」の集合であり、同一の「波」の上の「点」と「点」には〈時間〉の差異がないことによって、で、ある。「夕日」から、に、よって、こうした事態が問われていく。

したがって、この小文では、あらゆる引用は「点」であり、「点」と「点」から、の、「点」と「点」による問題提起のために、引用はなされていき、このことを踏まえて、「粒子」が「波」である、と、いうように論じられていくのである。

付記：この小文は、「「英才児」問題と『夕日の迷子』――聖徳学園小学校における和田幽玄の〈夢〉と上原輝男の〈誕生〉について――」（『児童の言語生態研究』第 20 号　２０２６年１２月刊行予定）の続編である。